バートランド・ラッセルの構成主義による対象的認識の可能性

吉田謙二

バートランド・ラッセル Bertrand Russell（1872–1970）の考え方に従えば、対象的存在の認識は、認識対象を論理的に分析して、当面のところ究極的であると思われる因子を合理的に再構成することによって得られる⑴。しかし、はたして再構成の結果が対象的直観の豊かさを保持しているのか、あるいは、対象の存在性を捉えているのかと問えば、問題はそれほど単純ではない。そこで、本論では、ラッセルの構成主義的認識の方法論的側面に焦点を絞って、対象的認識の可能性を見極めたい。

そのために、まず最初に、かれの論考の骨格をなす論理文法に含まれている存在仮定を明らかにして、ラッセルの構成主義的認識が対象に及ぶ範囲の限界を探る。ところが、対象把握の方法として、ラッセルは「記述」（description）に関する理論を展開しているので、ついで、その区分に従って、「確定的記述」（definite description）と「不定的記述」（indefinite description）の意味を述定することによって、ラッセルの方法論による対象的認識の可能性を明らかにする⑵。

Ⅰ

『プリンキピア・マテマティカ』（Principia Mathematica）に代表される、ふつうの述語論理学においては、個体変項の変域は現実の世界の事物であり、事物の名前としての固有名は個体定項である。そして、個体定項を固有名として論理文法の対象言語に導入するには、現実の世界にその記号に対応することが経験的に確認されるか、あるいは、すくなくとも仮定されなければならない。ところで、固有名を採る言語体系をLとすれば、Lは固有名の数に関して、固有名をまったく含まないL_0、n個の固有名を含むL_n、固有名を無限個含むL_∞に分類できる。すると、一階述語論理学において命題Sが論理的に真であるというのは、個体領域のすべての可能な場合にSが論理的に真であるということになる。そこで、$(x)P_x \supset (\exists x)P_x$は$L$において真であると仮定されるけれども、$L_0$においては前件が真で、後件が偽であるから、この存在命題は偽となり、Lに関しては事実的である。このことは論理科学を経験科学から独立させようとする、プリンキピア・マテマティカの論理主義と矛盾するから、形式主義的にLはL_0からの可能性を除き、個体領域の論理的可能性を空でない領域に限ればよい[3]。ところが、たとえば、基数1に1を加えて2が得られるとしたとき、数2がふつうの意味をもつためには、無限公理$(n)(n \varepsilon NCinduct \supset \exists ! n)$[4]（あらゆる$n$について、$n$が帰納的基数ならば$n$は空集合ではない）の$n$に定項2を置換して得られる$2 \varepsilon NCinduct \supset \exists ! 2$という事実的命題が真でなければならない。偽であれば2は空集合で、ふつうの算術の法則が成り立たない。

すなわち、1を繰り返し加えることによって大きな数が得られる、という見解が基数に関する算術の常識的な理解であろうけれども、この見解は、任意の帰納的基数nに1を加えると、その結果はnよりも大きいということを前提

している。そして、この前提を可能にするのは、世界の個体の総数が無限個なければならない、という経験的な存在仮定としての無限公理である。論理学によって数学を基礎づけるためには、ふつうの算術の成果と齟齬をきたしてはならないから、ラッセルは存在仮定としての無限公理を必然的に要請したのであり、この要請はラッセルの企図にとって不可避なものだったのである。そして、このような必然性が、論理的整合性を追及する論理主義にもとづいてなされる、ラッセルの認識に関する構成主義理論にも存在仮定を不可避的にもたらしたのであろう。というのは、かれの説くところにしたがえば、論理的な認識をめざす理論が「抽象的かつ一般的な性質を対象にしていても」[5]、それはやはりほかの諸学と「おなじように実在の世界をありのままに取り扱うものである。」[6]だから、そのような理論の用いる概念が意味しているものの存在を主張できるのは、「もっとも抽象的な研究にも保持されるべき実在感」[7]が、理論を構成する命題の要素である概念の基礎にあるときにかぎる。したがって、「実在感にしたがえば、命題の分析にさいしては、なんら非実在的なものは許容されるべきではない」[8]という存在仮定が必然的に主張されるのである。

たしかに、マイノンク（Meinong）が「円い四角」について提出した存在の問題は、ラッセルによれば、文章の論理的構造と言葉の意味する対象との対応関係を明確にすることによって解決される。つまり、「件のしかじかのもの（the so and so）」という確定的記述を含む命題は、命題函数 $P(x)$ を満足する値がつねにただ一つあり、しかもその値は、「x は C である」という命題函数と同値になる一つの要素 C であることを述べるものであるから、「黄金の山」は存在しないといえるのである。すると、事象とか、無限公理とかについて指摘されるような存在仮定の矛盾をラッセルが抱え込んだ理論的な理由は、ただちにこの見解に求められる。なぜなら、この見解が含意しているのは、論理的構造あるいは「形式が適切に満たされさえすれば、偽[9]であるものについて語るような言語はない[10]」という前提だからである。

ところでいま、「これは赤である」という命題定項を例にして考察すれば、ラッセルの主張は不可能であることがあきらかである。すなわち、「これは赤である」という命題定項の「これ」という言葉は、直示的に対象的存在を示しているから、この命題定項は、「xはCである」という命題函数を満足する値がつねにただ一つあり、その値は「xは赤である」という命題函数と同値になる赤だということを意味する。このことは、この命題函数に使われている赤が「単純でそれいじょう分析できない性質[11]」を意味していることになる。われわれの使用している赤という言葉は、いろいろな色合いの赤さを表現するために用いられているにもかかわらず、もしこの命題函数の赤という言葉で意味されるものが完全に分明であるとすれば、その分明な赤の一つの色合いは、実体的な普遍概念だということになる。すると、赤に関する命題の数とおなじだけ実体概念の数が可能になる。このことは、論理的構造が満たされても、われわれの言葉は無意味なことを語る可能性があるのを意味し、それゆえに、ラッセルの主張は否定されなければならないと言われうるのである。

これまでに述べてきたところからあきらかなように、ラッセルの論証の基礎にあるのは、けっきょく、論理的な必然性が存在の可能性ないしは必然性を与えるという論証仮定である。この仮定は、「どのような命題も真か偽かのどちらかである」という二値論理の基本的な前提に根ざしていると思われる。なぜなら、ある命題が真でなければ、その命題は偽であるとする立場は、不可能性から非存在性への結論が妥当することを、古来、形式論理学では自明のこととしてきているからである。この基本的な前提は、いわゆる排中律であり、「二つの相反する命題は同時に偽ではありえない」とも表現される。ところが、排中律そのものはかならずしも直観的に自明なものでなく、これをめぐって可能性と必然性の概念に関するいくつかの問題が考えられる。そしてまた、その問題は二値命題論理の様相命題（modal sentence）に関する定理の矛盾性に係わることでもある。

したがって、この論証仮定は、可能性と存在性の区別、あるいは、可能性と必然性の区別を無意味なものとして認めない場合にしか可能でない[12]。しかし、そのような矛盾が指摘されるのは、二値命題論理学によってはほんらい可能性について真理値を決定できないからである。そこで、三値命題論理学によって、「pが可能であるということは、非pであればpであることを意味する」という可能性の概念を定義し、また、可能性の定義に基づいて、「pが必然的であるというのは、pであれば非pであるということは真ではない、というのと同義である」と必然性の概念を定義すれば、様相命題はすべて成立し、存在者はかならずしも必然的でないばかりか、非存在者も不可能的ではなく、しかも、可能性から存在性を導くこともできない[13]。したがって、端的にいえば、ラッセルの構成主義的認識の方法においては、真か偽かのどちらかにことがらを決するのではなく、真理可能性の確度が決定されるものとしなければならない。また、論理的な可能性あるいは必然性から存在を仮定するべきではなく、論理的な可能性あるいは必然性によって、存在仮定の許可可能性が暫定的に決定できるにすぎない。つまり、二値論理に基づく命題の真理値が三値論理の一特殊として決定されうるように、ラッセルの構成主義理論によって獲得される対象的存在の認識は、基本的には、存在仮定の許可可能性の一つの確からしさを決定するものと理解すべきであって、けっして対象的存在の存在そのものの充全な認識ではないのである。

とは言え、ラッセルがこのような論考に終始した論理的理由がさらに求められなければならない。

Ⅱ

ラッセルが認識について語るとき、それを裏づけている考え方に「記述の理論」（theory of description）がある。ラ

ッセルの述べているところによれば、「記述」とは、「$\phi\hat{x}$ が一つの独立変数によって満足され、それにかぎるようなある函数である場合の『$\phi\hat{x}$ を満足する名辞 x』」[14]であり、記述は定義によってまた記述であるから、「$\phi\hat{x}$ を満足する名辞 x は $\psi\hat{x}$ を満足する」[15]と言えるのは、「x が b であり、ψb が真であるような名辞 b がある場合であり」[16]、「$\phi\hat{x}$ を満足する名辞 x」を "$(\iota x)(\psi x)$" で表わせば、$\psi(\iota x)(\psi x)$ は $(\exists b):\phi x.\equiv_x.x=b:\psi b.$ を意味する[17]。ところが、このとき、$(\iota x)(\psi x)$ は、それが含まれている命題においてどれだけの部分に及ぶのかは分明でない。

ラッセルによれば、$f\{(\iota x)(\phi x)\}$ がほかの命題の部分であるとき、$(\iota x)(\phi x)$ は二次的に生起（secondary occurrence）しており、$(\iota x)(\phi x)$ が二次的に生起しているときは、その命題は $(\iota x)(\phi x)$ の存在しない場合でも真である可能性がある。このことは、「日本の大統領のような人物は存在していない」という命題にもあてはまる。"ϕx" が「x は日本の大統領である」を意味するなら、この命題は、$\sim\{E!(\iota x)(\phi x)\}$ あるいは $\sim\{\exists c.c=(\iota x)(\phi x)\}$ として説明される。どちらも $(\iota x)(\phi x)$ の生起する命題が偽であることを立言している[18]。

ところで、プリンキピア・マテマティカでは、つぎのような命題が定義され、導出されている[19]。

14. 02　$E!(\iota x)(\phi x).=:(\exists b):\phi x.\equiv_x.x=b \quad Df$

14. 1　$.\supset\vdash::(\iota x)(\psi x)=(\iota x)(\psi x).\equiv:.(\exists b):\phi x.$

$\equiv_x.x=b:\ b=(\iota x)(\psi x):.$

$\equiv:.(\iota x)(\psi x)=(\iota x)(\phi x)::\supset\vdash.Prop$

14. 15　$\vdash:.(\iota x)(\phi x)=b.\supset:\psi\{(\iota x)(\phi x)\}.\equiv.\psi b$

14. 02は、「ψx を満足する x が存在する」という命題は、ϕx が x の唯一の値によって満足されるとき、そのときにかぎって成り立つことを定義するものである。14. 1が、$(\iota x)(\phi x)$ は、それが、"$(\iota x)(\phi x)=(\iota x)(\psi x)$" において一

時的に生起しているから、$(\iota x)(\psi x)$ の前に消去されることを示しており、当然、“$(\iota x)(\psi x)=(\iota x)(\phi x)$” なら、$(\iota x)(\psi x)$ がまず消去される。この消去の順序は真理値に違いを生じないはずである。14. 15は、$(\iota x)(\phi x)$ があるものを表わしていれば、$(\iota x)(\phi x)$ を含む命題が $(\iota x)(\phi x)$ の表わしているものの命題に等しいことを論理的に含意している。

こうしてみると、先取りして言えば、問題は確定的記述の不定性に収斂する。あるいは、「プリンキピア・マテマティカの著者」の場合のような、いわば適格（proper）でない欠格（improper）の記述[20]に関連する。すなわち、ラッセルは、どんな事柄でもこれを記すことを記述とよび、記述を不定的記述と確定的記述　とに分ける[21]。不定的記述とは、「あるしかじかのもの」（a so-and-so）という記述句であり、確定的記述とは、「くだんのしかじかのもの」（the so-and-so）という記述句である。確定的記述には、独自の対象を記述している場合とそうでない場合とがあり、さらに、それに応じて分類が考えられる。すなわち、〈日本の現首相〉という記述は、〈特定の一人の人物〉を独自の対象としているけれども、〈プリンキピア・マテマティカの著者〉という記述の対象は、ラッセルとホワイトヘッド Whitehead であるから、前者は、適格の確定的記述であるのに反して、後者は欠格の確定的記述であるとされる。

したがって、ラッセルの確定的記述という概念は、不定的記述の理論との関係で理解されるから、確定的記述に関する問題は、やはり不定的記述との関係で解明できるはずである。

不定的記述は、「あるしかじかのもの」という記述句を含み、「あるしかじかはかくかくである」という不定的記述は、“$FaxGx$” と記号化できる。

これは、$(\exists x)(fx \cdot Gx)$ と等値である。一方、適格の確定的記述は、当該の性質を有する独自の個体を外延するかのように想定されている。不定的記述が $(\exists x)(fx \cdot Gx)$ とも解釈できるということであれば、その例となるのは、

「ただ一つのものがしかじかであり、しかもそれはかくかくである」と表現されるような命題である。すると、不定的記述を固有名のように解釈して、不定的記述が個体を外延すると考えてよいと思えるような印象を受ける。しかし、もちろん、不定的記述は、その定義からして、特定の対象的存在に言及しないことは明らかである。だから、不定的記述に確定的な意味を与えるのは、すでに意味の知られているような語句を導入するか、あるいは、すでに知られているような表現を厳密に彫琢することによるかしなければならない。別の言い方をすれば、一つの表現は、その構成要素の意味によって理解されなければならない。そのために当の表現に見かけでは現われていないものも表現する必要がある。そのような表現が得られれば、これは論理的に完全な言語であるはずであり、そこでは不定的記述は徹底的に排除されていなければならない。だから、$(\exists x)(fx \cdot Gx)$ の例となるような命題は、日常的な言語の文法を表わす補助的手段であり、論理的に完全な言語に至る過渡的段階に現われるものである。

　しかし、欠格の確定的記述がなぜ成立するのかといえば、たんに偶然的な語の連鎖として可能なのではなく、やはりなんらかの対象の記述として成立しているからであると考えられる。端的にいえば、欠格の〈かくかくはしかじかである〉という命題は、〈唯一のものがかくかくであり、しかも、それがしかじかである〉という命題の一例だというわけである。こう考えると、欠格の確定的記述を含む命題は、たとえ有意味であってもなにを記述しているのか一意的に決定できないから、その真理値は偽であるとするか[22]、あるいは、あらかじめ選択された対象を記述しており、その真理値は真であるとするか、完全に矛盾する選択を迫られる。

　“On Denoting” を著す以前には、ラッセルは、確定的記述をなにかの意味を担うものとし、その意味は当の確定的記述を含む命題の構成要素であることとして理解した。そして、外延は、意味と対象との間の関係として解釈された。

“Principica Mathematica” においては、確定的記述は、「ただ一つのしかじかのものがあって、それ以外にないときの出来事に適用されるだけである。したがって、一つの記述は、x の一つの値によって満足され、それ以外の値によって満足されないような命題函数 ϕx を要求する。」[23]すなわち、確定的記述は、命題函数 ϕx を満足するときの x の値であり、唯一の出来事を意味する。だから、「『ϕx を満足する x』は、ある一定の対象を確定的に記述する記述である。もっとも、それがどんな対象を記述しているのかは知られない。」[24]しかし、$\vdash : (x) . \phi x . \supset . (\exists x) . \phi x$ が認められるかぎり、それはすべての x について ϕx が真であれば、ϕx はときとして真であることを意味するから、そこにはなにかが存在しているという仮定が含まれていなければならない[25]。

ところで、「x は実在しない。そして、x は非実在のあるものである」[26]という命題函数はときとして真である。というのは、この場合、x は、記述された対象として存在性を有するだけであって、「けっして何物をも記述しない不定の記述であり、非実在のあるものを記述する不定の記述ではない」[27]からである。したがって、非実在的なものの認知は、「x は実在しない」といった命題函数が、「ときには真になるということから導かれる」[28]のであって、非実在の存在によるものではない。不定的記述の非実在は、不定的記述に一致するどんな x もないことによって可能であり、したがって、また、不定的記述が可能なのは、「x はあるしかじかのものであるという命題函数が、ときとして真であることもある場合」[29]である。それゆえに、「x はひとである」という命題函数は、同一形式の無数の命題が可能であるのに反して、確定的記述を含む同一形式の命題は、「x はくだんのしかじかのものである」という命題函数になり、「すくなくとも一つの値に対しては真となる可能性がある。」[30]

確定的記述を含む命題は、つぎのように定義される。

すなわち、「(1) $\phi(x)$ はつねに『x は c である』と同値であり、(2) $\psi(x)$ が真であるような一つの要素 c がある」[31]

という命題が、「$\phi(x)$ を満足する一定の要素は $\psi(x)$ を満足する」[32]という命題の意味である、と。

この定義を用いると、たとえば「源氏物語の著者は日本人である」という命題は、cが日本人を意味するものとすれば、(1) xは源氏物語を書いたと『xはcである』とはつねに同値であり、かつ(2) cは日本人であるような一つの要素があるという命題によって定義できることは明白である。

以上に概括したところから、「記述」についてはつぎのように理解できる。すなわち、不定的記述は、命題函数 $\psi(x)$ を真ならしめるxが有する性質を有し、確定的記述は、$\psi(x)$ を満足するただ一つの値であり、その値は、「xはcである」という命題函数と同値になる一つの要素cである。したがって、「円い四角」や「黄金でできた山」という記述の対象の存在は問題にならない。というのは、「黄金でできていてしかも山であるようなものが存在している」、あるいは、「円であってしかも四角形であるようなものは存在しない」という命題に置換してみると、命題函数 ψx を真ならしめるxはありえないことが明らかであるからである。文章の文法的構造がその論理的構造と同一であり、黄金でできた山といったものが存在を有するという考え方は、「xは実在しない」という命題が、xがなにものをも記述していないときにかぎって真であるという命題によって、まったく誤りなのである。

ところが、確定的記述については、それを含む命題函数がすくなくとも一つの値について真となる可能性があると言われ、存在と不可分であるかのごとく語られていながら、その証明は行なわれていない。$\phi(x)$ はつねに「xはcである」と同値であり、$\psi(x)$ が真であるような一つの要素があるということが、$\phi(x)$ を満足する要素があることの定義として認められるからといって、要素cの存在性がそのまま端的に自明であるという訳ではない。

Ⅲ

文法が実体的存在を要求する場合、論理的に完全な言語を得るには、フレーゲ Gottlob Frege のように存在論的な考案によって日常言語の元のままの状態を保存することもできるけれども[33]、すくなくとも確定的記述に関して、ラッセルはそれを文法的再構成と置換とによって行なおうとした。フレーゲによれば、見かけの文法的形式を受け入れ、集合概念を用いることになる。この方法は、フレーゲ自身の数の取り扱いや、カルナップ Rudolf Carnap による命題の模型の集合への還元[34]に機作しているのが見うけられる。ラッセルの方法によれば、「二つの花がある」という命題は、「一つの花があり、もう一つあり、ほかにはない」という翻訳が行なわれよう。この翻訳自体は表面上なにも問題ないように思われるが、そのような言語的置換は、確定的記述の対象の存在の不確定性を内包している。ラッセルの認識論的格率は、オッカムの剃刀であり、それはつぎのように述べられる原理である。「可能なときはいつでも、推論された実体に論理的構成体を置換するべきである[35]。」この原理を用いて、たとえば、基数は所与の集合の基数と考えられ、フレーゲに則って、ラッセルが基数に与えた定義は、$NC = \hat{\mu}\{(\exists\alpha)\cdot\mu = Nc`\alpha\}$[36]であり、この場合 NC は基数の集合を表わすから、基数とは所与の集合に相似なすべての集合の集合ということになり、「基数」にあたる実体の集合を推論する必要がなくなる。このように、数学的実体概念については、ラッセルもフレーゲの方法に依っているにもかかわらず、ラッセルはフレーゲの存在論的構成の意味を理解し損ねたように思われる。というのは、オッカムの剃刀を実体概念の数を極小にするのに有効な原理とするあまり、みずからの言語的置換の存在論的構成の方法との区別が、ラッセルにとってはそれほど明確ではなかったからである。

記述の理論は、日常言語の文法の論理的欠陥ともいうべき、存在の構造に関する誤りを正そうとする分析方法であり、文脈的定義によって、存在の特性を記述するのに必要でないような概念を消去するものであるから、論理的に完全な言語においては、記述句は現われず、限量詞とか、変項とか、論理定項とかによる表現だけが残ると思われる[37]。そうであるとすれば、記述は存在とは無縁であるとも言える。記述の外延が存在しないような場合についての想定は、記述句とそのラッセル流の分析とに関する矛盾に関係するものではないとする解釈も可能であろうし[38]、また、ストローソン Strawson のように、記述句の言及する対象の存在は前提されており、対象が存在していなければ、記述句を含む命題は、真理値を欠いた表現を行なうために用いられているのだと見做すこともできよう[39]。さらに、記述の理論の重要な帰結は、存在が命題函数の属性として扱われるということであり、存在する対象は、満足される命題函数に依存すると理解できるから[40]、クワイン W. V. O. Quine のように、「存在することは変項の値であることだ」[41]と把握するにいたりもするのであろう。

直感的な見方をすれば、ある命題の論理的形式はその文法的形式の鏡影である。ある表現が文法的に正しいのは、その表現が文法的に単純な構成要素から形式的規則に則って「構成される」ときである。そのような構成は当の表現に文法的構造もしくは文法的形式を割り当てる。したがって、文法的関係の説明は、その文法的形式を示すことにある。名詞節であるとか、所与の命題の主辞であるとかというような文法的諸性質や諸関係が問題とされている表現の文法的形式に依存しているのとちょうどおなじように、妥当であるとか、所与の命題の論理的帰結であるとかというような論理的諸性質や諸関係は問題とされている表現の論理的形式に依存している。この論理的形式は言語のなんらかの評価規則によって決定されるはずであり、それらの規則がわれわれに教えるのは、ある表現の意味論的価値を、その表現の論理的に単純な構成要素によって「構成する」方法である。

ある命題の真理値のこのような構成は、ある命題についての文法的説明がその命題の文法的形式を示す仕方に似た方法で、当の命題の論理的構造もしくは論理的形式を示す。日常言語において、文の見かけの文法的形式を変えない置換、たとえば、固有名を「あるひと」someone で置換することは、その操作を加えた文のあいだの論理的帰結の諸関係を導入したり、抹消したりする論理的形式の変化を示唆する[42]。

ラッセルとフレーゲはともに日常言語の論理的不完全性を取り除くことに関心があったが、その方法はまったく異なっていた。論理主義を貫けば、なんらかの翻訳規則を文脈的定義の説明のために仮定することが必要であり、その定義にしたがえば、確定的記述は完全な言語においてはまったく生じない。文法が本性の漠然とした実体的存在を要求する場合、フレーゲは、数の場合のように、構成を企てた。だから、フレーゲは、存在論的な考察によって日常言語の元のままの状態を保持しようとしたのに反して、ラッセルの対応の仕方は、すくなくとも確定的記述の場合には、文法的再構成と置換であった[43]。

しかし、ラッセルの構成主義的な文法的置換に関わる曖昧さは、ただちに存在論的解釈を示唆していると思われる。すなわち、ラッセルによれば「実在感に従えば、名詞の分析に関しては、なんら非実在的なものは許容されるべきではない」[44]のであるから、欠格の確定的記述についてもその方向で理解する方途を探らねばならない。一般に、伝統的な主語・述語論理に従えば、先述のように文法的形式がもっとも重要な指標である。したがって、「わたしは太郎に会った」と「わたしはあるひとに会った」という二つの命題は同一形式の命題であると考えられている。ところが、後者は、「『わたしは x に会った、そして x はひとである』という命題函数はときとして真である」[45]と換言できるのに反して、前者は実在の人物である太郎を名指しており、形式は、「わたしは x に会った」というにすぎない。「わたしはあるひとに会った」という命題は、「あるひと」が太郎を意味しようがしまいが、人間についてのなんらか

の定義を知っているすべてのひとに理解される。つまり、この命題には、実際の人間が要素として含まれているのではなく、ひとという一般概念が要素になっているのである。したがって、明らかに、「わたしは太郎に会った」と「わたしはあるひとに会った」とは、まったく異なる命題である。「わたしは雪女に会った」という命題も、わたしは*x*に会ったという形式によって可能なのである。

したがって、上述の理解を踏まえてつぎのように結論できる。すなわち、命題の論理的分析の指標に命題の意味を取れば、命題の要素になっているのは、概念であって、実在の雪女ではない。だから、われわれにとって実在的であるのは概念である。ラッセルによれば、「われわれにとって存在するのは、唯一の世界すなわち実在の世界であり」[46]、ひとびとがハムレットを読むときに体験する感情や思想、あるいは、シェイクスピアの想像が実在の世界の一部である。それゆえに、確定的記述は、適格の記述であっても欠格の記述であっても、ラッセルの言うように、論理学が「実在の世界をありのままに取り扱うものである」[47]かぎり、その真理値を偽とする解決策は採れないし、あらかじめ選択された対象を措定しても欠格の記述の対象の一意的な決定不能性が克服されるわけではない。むしろ、実在感にしたがえば、シェイクスピアの想念が存在し、われわれの概念が実在しているのであるから、それらの想念や概念も論理学の扱うべき実在の世界の要素でなければならない。したがって、先に述べた欠格の確定的記述にまつわる真偽相反する選択は、実はほんらい矛盾的ではない。というのは、そのような矛盾は、確定的記述がその記述によって記述されている対象の記号であると解釈し、欠格の確定的記述はそれによって記述されている対象の存在が判明でないと理解するところに由来するけれども、記述の意味するものの存在を主張できるのは、「もっとも抽象的な研究にも保持されるべき実在感」[48]が記述の基礎にあるときであるとすれば、欠格の確定的記述の対象の側に存在性を求めることは無意味であり、欠格の確定的記述そのものがわれわれにとって実在しているものだからである。約言

すれば、欠格の確定的記述が存在であって、欠格の確定的記述の対象は存在ではないのである。そうであるからこそ、不定的記述の「円い四角」については「円であって四角であるもの」という言語的置換が有意味なのである。また、記述の消去が可能であるのは、確定的記述が適格のものであっても欠格のものであっても、記述が対象的存在であるからである。記述の対象の存在が関わっていれば、その存在は消去できるはずがないのである。$(\iota x)(\phi x)$ はたんなる記号であり、われわれが文字や概念を導入するときにふつう仮定されているような対象の存在を表しておらず、命題函数 fy の y に置換されるときにかぎって有意味なのである。だから、欠格の確定的記述は、対象的存在の記号ではなく、対象的存在がわれわれにとっての存在としての欠格の確定的記述の記号なのである。言い換えれば、記述が存在の象徴なのではなくて、存在が記述の象徴なのである。この観点に立てば、欠格の確定的記述も実在感を保持し、しかも、その真偽は記述の記号としての対象的存在との関連で決定されるはずである。

　このように見てくると、本論の目的としたラッセルの構成主義による対象的認識の可能性については、つぎのように概括できよう。すなわち、ラッセルの構成主義理論は、論理的な必然性が存在の可能性ないしは必然性を与える、という論証仮定に基づいて、実在感にしたがえば命題の分析をするときに非実在的なものは許容できない、との存在仮定を合理化しようとする試みである。そのために、ラッセルはわたしたちが対象を把える際に用いる言語的表現を「記述」として取り出して検討を加えたのであるけれども、先述のように、不定的記述によっても、あるいは、確定的記述によっても、対象の存在性は端的に自明なものとしては記述できないことが明らかになった。これはラッセルの方法論の有効性を疑わしめる結果であり、論理的必然性が存在の可能性や必然を保証するわけではないことの証明であるから、存在仮定の正当化、合理化の手段は失われたもののようである。ところが、記述は対象的存在の概念形象であるから、対象的実在の存在性は概念的実在として捉えられてこそ人間の認識の問題になるとすれば、ラッセル

の構成主義理論による対象的存在の認識の可能性は、概念の全範囲に及び、分析の終るところで終ると考えられるので、分析に終わりがなければ、その可能性は無限である。しかし、直接的経験の対象の存在は、実はラッセルの構成主義による対象的認識の埒外にあると言わなければならない。ラッセルが対象的認識を論じて、センシビリア（sensibilia）という存在概念を用いながら、それを論理的仮構として棄て去るのも[49]、たんなるオッカムの剃刀の使用ではなく、この意味であったと解される。したがって、その点から言えば、自らの哲学的立場を論理的原子論（logical atomism）と素朴実在論（naive realism）と自認していた[50]ラッセルは、論理的原子論者であっても、実際には素朴実在論者ではなく、むしろ概念実在論者（conceptual realist）であったと推測され、対象的認識の可能性についても、その範疇で予想するべきであるかもしれないのである。

註

（1）cf., Bertrand Russell, *Mysticism and Logic*,（London : George Allen and Unwin, 1917）, P. 155. 以降 M. A. L. と記す。cf., Bertrand Russell, *Indtroduction to Mathematical Philosophy*,（London, George Allen & Unwin, 1919）, P. 1. 以降 I. T. M. P. と記す。

（2）本論の目的に関わる論述のために、拙論「バーランド・ラッセルの構成主義における論理的限界について」（人文学第一二四号所収）、「バーランド・ラッセルの記述の理論における『記述句』について」（人文学第一三四号所収）および「バーランド・ラッセルの確定的記述について」（人文学第一四二号所収）の文言を修正しつつ用いたので、関連する事項についてはそれらを参照されたい。

（3）cf., 永井成男「存在仮定のない論理学—Principia Mathematica の体系から存在仮定を除く試み—」（『科学哲学年報』第３巻 1963）

（4）cf., Alfred North Whitehead & Bertrand Russell, *Principia Mathematica*,（London, Cambidge University Press, 1927）, 2nd. ed., pp. 181–3　以降 P. M. と記す

（5）I. T. M. P., P. 169

(6) ibid.
(7) ibid.
(8) op, cit., P. 170
(9) 対応する現実の対象的存在がなければ偽とされる。
(10) Bertrand Russell, *Reason and Analysis*,（London, George Allen & Unwin, 1962）, P. 139.
(11) I. T. M. P., P. 132.
(12) cf., 拙論「バートランド・ラッセルの構成主義理論における論理的限界について」（『人文学』第一二四号　一九七三　二五一五二頁　とくに四一—四九頁
(13) cf., ibid.
(14) P. M., P. 173
(15) ibid.
(16) ibid.
(17) cf., ibid.
(18) cf., op. cit., PP. 68–9.
(19) cf., P. M., PP. 173–79
(20) cf., David Kaplan, "What is Russell's Theory of Description", in *Bertrand Russell – A Collection of Critical Essay*, ed. by L. J. Pears（New York, Doubleday, 1972）. P. 227. 以降 W. R. T. D. と記す。
(21) cf., Bertrand Russell, "On Denoting", Mind, Vol. 14, 1905. Reprinted in *Russell's Logic and Knowledge*, ed. by R. C. Marsh（London, George Allen & Unwin, 1956）, PP. 41–56
(22) cf., P. M., vol. I, PP. 1–15
(23) op. cit., P. 30
(24) cf., op. cit., P. 19
(25) cf., op. cit., P. 30
(26) I. T. M. P., P. 170

(27) ibid.
(28) ibid.
(29) op. cit., P. 172
(30) ibid.
(31) op. cit., P. 178
(32) ibid.
(33) cf., Gottlob Frege, *Grundlagen der Arithmetik*,（Breslaw, 1884）
(34) cf., Rudolf Carnap, *Meaning and Necessity*,（Chicago : The University of Chicago Press, 1947）, PP. 177–182
(35) Bertrand Russell, *Mysticism and Logic*,（London : George Allen and Unwin, 1947）, P. 155　以降 M. A. L と記す
(36) P. M., P. 5.
(37) cf., R. J. Clack, *Bertrand Russell's Philosophy of Language*,（Hague : Martinus Nyhof, 1969）, P. 53.
(38) cf., R. M. Sainsbury, *Russell*,（London : Routeledge & Keagan Paul, 1979）, PP. 116–22.
(39) cf., Max Black, "Russell's Philosophy of Language", in *The Philosophy of Bertrand Russell,* ed. by P. A. Schilpp,（New York : Tudor Publishing Company, 1944）, PP. 227–55
(40) cf., A. J. Ayer, *Russell*,（London : The Woburn Press, London, 1974）, PP. 59–60
(41) W. V. O. Quine, *From a Logical Point of View*,（Massachusetts : Harvard University Press, 1964）, 2nd ed., P. 15
(42) W. R. T. D., PP. 235–36.
(43) cf., op. cit., P. 239.
(44) I. T. M. P., P. 170
(45) op. cit., P. 168.
(46) op. cit., P. 169.
(47) ibid.
(48) ibid.
(49) cf., M. A. L. PP. 148–60

(50) Bertrand Russell, *Bertrand Russell Speaks His Mind*,（Connecticut : Greenwood Press, 1974, originally published by The World Publishing Company, 1960）, P. 15